ブリ

竹内 甫

僕の友達は、寿司が好きだ。
だから、月に一回ほど友達と一緒に寿司屋に行く。
僕は、マグロやサーモン、ハマチやカンパチを食べるが、
友達は、ブリしか食べない。
（なんでブリしか食べないんだろう。）
僕は、最初の方は気にならなかったが、何回来ても、
ブリしか食べないので、さすがに気味が悪くなった。
僕は、結局その子の友達をやめた。
そしてまた新しい友達を作った。
その新しい友達も寿司が好きみたいで、よく寿司屋に
行っているみたいだ。
（まさかそんなことはないだろう。）
ある日、僕は友達に寿司屋に誘われて、一緒に寿司屋
に行った。
僕はいつもどおりマグロやサーモンなどを食べる。
だが、その友達もブリしか食べない。
何回来ても、やっぱりブリしか食べない。
僕は、またその子と友達をやめた。
そして、もうそのことが怖くなって、自分の部屋に閉
じこもることにした。
自分の部屋に閉じこもるようにして二ヶ月ほどたった
ある日の夜、急に自分の部屋のドアをノックする音が
聞こえる。
（ドンドンドンドンドン。）
僕は、親がノックしても怖いからドアは開けないよう
にしている。
だが、二十分ほどたっても、ノックする音が消えない。
（誰なんだろう。でも出たら絶対にヤバい。）
そして、急にドアが開いた。
そこから出てきたのは、ブリのきぐるみをきた誰かだった。
僕は、その誰かに冷凍されたブリで叩かれた。
そして、意識不明の重体になり二ヶ月ほど入院した。
その後、僕は無事退院して家に帰った。
だが、あの夜冷凍されたブリで叩かれたことを全く忘
れることができなかった。
（あれは本当に誰だったんだろう。）
僕は、その日から全くブリを食べなくなって、ブリが
食卓に出てきても怖くなってひきこもるようになって
しまった。